

## 河上肇と「無我苑」

いろいろな意味で、いまさら河上肇でもあるまいとの声も多くあると思うが、私は、なぜか、いま河上に強い関心を抱いている。それは彼が科学的社会主義者として、また、マルクス主義経済学の先駆者であったというような点に關してではない。

たしかに、河上の学問的業績は、当時にあつて群を抜いていたし、『資本論入門』などが多くの若者に、経済学の関心を抱かせたことは間違いない。大内兵衛は、河上の『貧乏物語』について、次のような言辞を残している。

「今日、五十代で、経済学をもつて身を立っているような、もしくはそうでなくても多少とも経済学に興味をもつた経験のあるような日本のインテリに聞いて見よ。そのほとんど全部は、博士のこの書（『貧乏物語』）によつて経済学の意義を知つたというであらう。」

そしてその多くは自分もこの書にみちびかれてその道に志したというであらう。<sup>(1)</sup>

今日、河上が経済学という学問世界で果した役割とその限界を指摘することは、そう困難なことではない。しかし、彼の生涯を貫いている道を求めての真摯な姿、つまり求道家としての精神的雰囲気に対するの評価になると、やゝ複雑である。

明治十二年十月二十日、山口県の錦見村に生を受けて以来、六十八年の間、並の研究者や教師では通りえない波乱万丈の人生を彼は送っている。

幼年時代は、両親の離婚ということもあつて、祖母に育てられ、彼自身が語っていることであるが、極端な我儘で家人を困らせたという。ひどい癩癩もおこした。

「私は幼けない頃から、ひどい癩癩持ちであつた。」

綱沢 満昭

何か腹を立てて泣き出したら、まるで手はつけられなかった。：(略)：駄々をこねると、懲しめのため押入などへ監禁されるのが普通なのに、私の場合は、大人の方が物置などに逃げ込んで難を避けた。<sup>(2)</sup>

通学についてもこう言っている。

「私は満四年五ヶ月になった時から小学校に通うようになったが、その実、学校へ通うといっても、私は毎日おんぶされて往復したのである。：(略)：弟も一緒に通学するようになってからでも、二つ年上である兄のおんぶされ、弟の方は歩いた。書いておくのも恥しいが、私はそんな我儘をして育ったのである。<sup>(3)</sup>」

この偏愛的環境のなかで、やりたいほうだいの我儘を許してもらった己を取じると同時に、他に對して彼は強烈な懺悔の気持を抱き、他のために自己犠牲を己に強要徹底して贖罪とするといった精神が形成されたと思われる。絶対的非利己主義、利他主義への執着は、ここにその淵源の一つがありはしないか。その上に次々と非利己主義的精神で、この世を貫いて生きようとした人々たちへの共感、共鳴があつたと考えられる。

吉田松陰への憧憬もその一つである。河上は、たびたび松陰の名を使用し、尊敬の念を表すると共に己自身の士気を鼓舞している。

「梅陰生」という判を作っていたことは先きに述べたが、私はこの判を吉田松陰先生に私淑して付けた。<sup>(4)</sup>

「徳富蘇峰の『吉田松陰』は私が高等中学校の予科に入った年に刊行された。私はそれをば非常な感激を以て読んだことを記憶している。<sup>(5)</sup>」

「私の胸の底に沈潜していた経世家的とでもいったような欲望は、松陰先生によって絶えず刺激されたことと思うが、……<sup>(6)</sup>」

この松陰の志士の心情の影響は、のちに河上がコミュニストになつてからも消えることはなかった。

学生時代(東京帝国大学)の木下尚江、内村鑑三たちの影響も大きい。彼らの関係でキリスト教にも強く魅せられ、絶対的非利己主義を、「マタイ伝」より受容している。

己の精神史はこのバイブルとの接触をその原点とする、と河上はいう。とくに彼が注目し、精神の拠所としたのは、次の個所であつたとしてそれを引用している。

る。

「人もし汝の石の頬をうたば、左をも向けよ。なんじを訟への下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。人もし汝に一里ゆくことを強いなば、共に二里ゆけ。なんじに請ふ者にあたへ、借らんとする者を拒むな。<sup>(7)</sup>」

田中正造の足尾鉍毒事件には、このほか強い関心を持った。明治三十四年十二月二十日の本郷中央会堂での鉍毒地救済婦人会主催の演説会に参加した河上は、演説会終了後、異常ともとれる行動に出たのである。この行動は、「特志の大学生」として、「毎日新聞」に掲載された。それはこういうことであつた。

河上がいうには「私は躊躇することなく、差し当り必要なもの以外は一切残らず寄付しようとして決心した。私は会場を出る時、着ていた二重外套と羽織と襟巻を脱いで係りの婦人に渡し<sup>(8)</sup>」、さらに家にあつたあらゆる衣類を、翌日、救済会に届けるという「善行」(奇行)を行つたのである。

明治三十八年十月より、千山万水楼主人という筆名で「社会主義評論」なるものを、「読売新聞」に掲載することになった。この時期、社会主義に関する代表作

としては、明治三十六年の片山潜の『わが社会主義』と、幸徳秋水の『社会主義神髓』とがある。両書は、日本の社会主義に関する一对の玉と呼ばれるものであつた。

河上の「社会主義評論」は、真の社会主義からは遠いが、東西の帝国大学の大学の大物経済学者の研究を痛罵し、また安部磯雄、堺利彦らの思想をも批判し、彼なりの理想としての社会主義について言及したものである<sup>(9)</sup>。

時代的背景もさることながら、河上のすぐれた文章は多くの読者を魅了し、大いなる旋風を巻き起こし、「読売新聞」の発行部数は、急増した。しかし、これが「第三十五信」まで続いたところで、突然打ち切りとなつたのである。つまり、「第三十六信」は、「摺筆の辞」となつてしまつた。これまで不眠不休の努力で、熱情をもつて執筆し、読者をうならせてきたものを、河上は自ら、それを戯言だつたといふのである。彼の言は次のようである。

『「社会主義評論」一篇信を重ねることここに三十六、幸いにして多数読者の歓迎するところとなり、千山万水楼主人の虚名広く江湖に喧伝せらるるに至らし

は、実に余が予想のほかに出でたり。しかれども今日に至ってはこれを見る、真に一場の噺語に過ぎず、むしろ笑うべきのいたりなり。すなわちまさに本日をもって筆をおかんとす。<sup>(9)</sup>

まさしく青天の霹靂であった。この極端な河上の豹変ぶりに、驚愕の聲が巻き起った。昨日までの己と本日との己とは、根本的に違う人間だというのだから大変である。これを珍事、奇怪と呼ばずして、何といえよよかろうか。疑念、嘲笑、怒りが河上の周囲を襲った。

大熊信行は、河上の生涯には、三つの「奇行」があったという。一つは、先にあげた足尾鉍毒事件の際に見せた、身ぐるみはがすばかりの寄付の件であり、二つ目は、この「社会主義評論」を擱筆にし、伊藤証信の無我苑に身を投じたこと、そして、いま一つは、マルクス主義者として政治的実践運動に走ったことであると。河上の無我苑への突入について大熊はこうのべている。

「当時、おなじくトルストイの影響をうけたものに、真宗大学研究科在籍の学生伊藤証信があり、『無我の愛』を唱えて、『無我苑』という教団を組織した。河上はその教義に同感し、一切を放棄してこれに飛び

込んだ。かれの魂をつらぬいたのは、『絶対的非利己主義』の靈感であった。：（略）：もしそのような宗教家としての実践が長く継続し発展するとすれば、河上の伝記は別なものになったろうが、無我苑行者の生活は六十日かぎりで打切られた。したがって無我苑入りは、河上の第二の奇行として記録されるにとどまっている。<sup>(10)</sup>

この河上の伊藤との接触は、河上の人生にとって、重要な意味を持つことはいうまでもないが、近代日本における宗教と科学、また「信」・「情」と「知」といった問題を考えるうえで、極めて大きな示唆を私たちに与えてくれる問題でもある。

河上の生き方には、大きな癖があった。一度あることに關して確信を持てば、それ以外のものは放擲し、徹頭徹尾それに没頭し、熱中する。思索するのみならず、それを実践に移す。しかし、それほどまでにして獲得したものであっても、それを誤りだと自ら判断すれば、瞬時にして、それをまた放棄する。これが河上の人生であり、思想的営為でもあった。ゆきつくところは、捨身の行である。河上はこういう。

「いやしくも自分の眼前に真理だとして現われ来つ

たものは、それが如何ようのものであろうとも更に躊躇することなく、いつでも直ちにこれを受け入れ、そして既にこれを受け入れた以上、飽くまでこれに喰い下がり、：（略）：しかし、こうした心持で夢中になつて進んでゆくうちに、最初真理であると思つて取組んだ相手がそうでなかつたことを見極めるに至るや否や、その瞬間、一切の行掛りに拘泥することなく、断乎として直ちにこれを振り棄てる。<sup>12)</sup>

節操という点からすれば、河上のこのような変転ぶり、豹変ぶりは、決してほめられたものではなからう。しかし、一度受容したものを終生維持し、固執するだけが、唯一絶対の思想家の条件でもあるまい。断絶も修正も飛躍も、真理追求の過程では、あるのがむしろ当然ではないか。真の思想の蓄積にはそういうこともまた必要なことである。

いかなる信念もなく、浮遊している人間で、時代を見る眼もなく、においをかぐ力もなく、ただ何ものかによつてふりまわされているだけだと河上を罵倒する人物もいる。昭和八年三月の段階で、杉山平助は次のように酷評している。

「考へてもわかることだが、あの人（河上肇）には、

何ら自主的な強い性格も透徹した洞察力も持ちあわせない人間としてはきはめて鈍くて平凡な、理想家肌の一学徒に過ぎないことを誰が否定し得よう。これは彼の過去を通覧すれば明らかで、彼は何らのオリヂナリティも持ちあわせない、いつも何かに影響され、支配され迷ひに迷つてあの歳に到達した人である。：（略）：いかなる点から見ても、決して彼はトッパに立つて時代を支配する能力のある人ではないのである。<sup>13)</sup>

前述した通り、この「社会主義評論」から伊藤の無我苑への突入事件は、大きな社会的反響を呼んだ。この評論が、美しい文章で、説得力のあつたことはいまでもないが、当時の高名なる東西帝国大学の教授たちを、こきおろし、風雲児さながらの活躍をしていた彼が、その連載をストップし、家族をかえることもなく、すべての大学の職を捨てて無我苑に入るのであるから、世間は驚くほかない。

「社会主義評論」の「第一信」には、彼はこう書いていたのである。

「夫れ社会主義の本質たる、固と経済上の一主義たり、然も其関連する所、政治、宗教、倫理、道德、其

他社会各般の事項に及ぶ、隨つて之れが完全なる批評は、是等社会各般の諸学に通するの士を待つて始めて聞くを得べし、：（略）：足下乞ふ余をして、姑く虚心坦懐、斯の主義の根本をありの儘に記述せしめ且つ評論せしめよ、面して若し余力あらば、二三名の社会主義者に就き、其言論行動の是非を批判し、更に騎虎の勢を得ば、之れに対する官府の政策態度に就きて其の得失を論議するあらしめよ、<sup>(44)</sup>」

己の主張を平易にして暢達、意氣行昂として吐露していたこの論潮も次第に変化し、前述した通り「第三十五信」で止め、突然「第三十六信」を「擱筆の辞」としたのである。

河上は、昨日の己と今日の己とは、極端に異つた人間である、と平然といつてのける。今日の己は、絶対的真理を獲得した最高に高潔な人間である、と恥かしげもなくいうのである。この昂揚した彼の声を聞いてみよう。

「既に余は絶対最高の真理を捉得せり、其の真理の偉大なる人界の言を以て之を形容するに由なく、固より尋常人の思議す可き之に非らず、故に此の新たに得たる智識を以て、昨の余が有せし智識に比せんか、其

差恰も絶対無辺の宇宙と一個有限の余が肉体との差に似たり、嗚呼余の新たに得たる真理の何ぞ夫れ広大なるや、既に斯の如きの最高真理を研鑽し了へたり、しからば昨の余と今の余と全く其の人格を一変するに至りたるもの何ぞ怪むに足らんや、これ今日の余にとりて「社会主義評論」が実一場の嘔語にだも及ばざるが如く見ゆる所似なり。<sup>(45)</sup>」

並の人間のとうていおよばぬところの絶対的真理を獲得してしまつた河上は、己の人生の最高の地点に到達したのであり、いまや、己を圍繞する万事が、彼をして、最高の幸福、安定をもたらすものとなつたのである。

かかる発言をし、行動をとつた河上を、世間の人は、奇人、変人と呼ぶ。そう呼ぶなら呼べ、世間評などどうでもいと河上は冷静である。昨日までの己と全く違ふ河上がここ存在するというのである。「朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり」の心境で、絶対的最高の価値を獲得した河上に恐いものはない。もはや、死の恐怖さえなかつた。

「嗚呼、余浅学下根、しかも今幸にして此の最高真理を得て、夕に死すとも可なりの境に入る。是に於て

か絶対の平安あり、絶対の自由あり、絶対の幸福あり、<sup>(85)</sup>

これは、確かに河上の人生のある段階における異変である。何が彼をして、この心境に到達せしめたのか。吉田松陰の志士の意識か、木下尚江、内村鑑三らを通してのキリスト教か、田中正造の自己犠牲的精神か、はたまたトルストイか。どれもこれもそのことにかかわつてはいよう。しかし、そういうものを受容する器というものが、河上には幼少期の贖罪意識としてあるように私には思える。

この大いなる変身、豹変の直接的契機が、伊藤証信の無我の愛にあったことは、多くの人の認めるところではある。ところで、無我の愛を唱え、実践、伝道した伊藤とは、いったいいかなる人物か、そして無我の愛とは。

伊藤は、真宗大学在学中に、仲間と共に、「無我の愛」なる雑誌を発行し、無我の愛の実践、伝道に、十八年の生涯を捧げた人物である<sup>(86)</sup>。明治三十七年八月二十七日の夜、伊藤は、心的革命を体感したという。その翌年、明治三十八年の六月十日に、「無我の愛」を創刊したのであるが、そこで彼はこうのべてい

る。

「吾人の期する所は我の世界を亡ぼして無我の愛の世界を建設せんとするにある也、吾人は、自力主義、我利主義の基礎に立てる現代の思想界を根底より破壊して、個人の心霊の上に、他力主義、利他主義の大理想を実施せしめんとするもの也。貴人は現代社会の裏面に漲溢せる人類の苦痛煩悶を根本的に除去し、個人の心霊の上に、絶対的幸福の妙境を開顕せしめんとするもの也。<sup>(88)</sup>」

伊藤が発行したこの「無我の愛」は、好評を博し、広い読者層を持った。この小さな印刷物が、大きな反響を呼び、人を引きつけた背景には、近代日本における、この時期の特殊な状況が存在していたのである。

日清戦争以後、ふくれあがつてゆく日本という外型の裏に、しのびよる個人の内面的苦悩、煩悶、怨念の拡大、深化があった。国家と個人の健全な緊張感次第に希薄となり、内部全命に沈潜してゆく若者が増大していた。明治三十六年五月二十一日の藤村操の華嚴の滝の投身自殺は、その象徴的事件の一つであった<sup>(89)</sup>。国家のためという世俗的出世欲などが、陳腐なもの、恥になるものとして放擲される風景がそこに

はあった。このような時代のなかで、伊藤の「無我」という言葉は、なんとすがすがしく、魅力あるものであったことか。「無我の愛」の発刊当初の状況は次のように語られている。

「始めの間は毎号千部づゝ刷つて居たが、やがて二千部となり三千部となり、九ヶ月の後には四千五百部を刷るやうになった。執筆者も始めは私と安藤、和田の二君であったが、後には数十人の同人を得、全国新進の思想家から多大の同情と同感とを得、名実共に心靈界に於ける公の機関たらしむるに至つた。<sup>20)</sup>」

この「無我の愛」を誌上で強説する伊藤の主義、主張は、大学当局を大きく、強く刺激し、激しい攻撃にさらされることとなる。伊藤の無我苑には近づくな、「無我の愛」は読むな、と学長みずからが学生に通告した。当然のことながら、真宗大学派からも批判、攻撃され、ついに、彼は大学を退学し、僧籍は返上するというとんだ羽目に陥つた。

明治三十八年六月に発刊したばかりの「無我の愛」は、その年の十月には、もはや「脱宗号」とならざるをえなかつた。血で染められたように真赤なこの印刷物で、伊藤は、私利私欲、虚偽虚栄に走る真宗世界の

現実に、痛棒を下すべく、彼の心情を吐露したのであった。伊藤は「脱宗号」に関してこうのべている。

「『無我の愛』第十号を特に脱宗号と名けて、全部赤刷りとなし、其中に退校と脱宗との止むを得ざるに至つた理由を詳述して、之を天下に発表し、一方僧籍返上届と度牒（僧侶の鑑札の如きもの）と該雑誌とを同封して本山へ郵送し、同時に郷里伊勢の父母にも此事を通知し、茲に私は全く脱宗の本壊を遂げ終つたのである。時に明治三十八年十月十日で、私は年令正に三十歳であつた。<sup>21)</sup>」

この「脱宗号」は、広く世間に知られ、伊藤に対する支援、激励の声が寄せられた。幸徳秋水、堺利彦、綱島染川、内山愚童らの熱い支援の声が伊藤のもとに届いた。「見神の実験」を世に問うことで、世間を騒然とさせた綱島染川は、次のような同情を伊藤に寄せている。

「『無我の愛』脱宗号、少からず同感と歎美点とを以て拝読仕候：『神の子てふ自覚に立ちて神と共に樂み、神と共に働く』これ小生が達し得たる最高の悟境に候。これ『自己の運命を全く他の愛に任せ、同時に全力を献げて他を愛する』無我愛の主義と究竟の内味



を同じうするものかと存候、今朝此事に想到して大歡喜を得申候。<sup>22)</sup>

河上がこの伊藤の「無我の愛」に関心を寄せる直接の契機となったのは、彼の「社会主義評論」が、この「無我の愛」で、取り上げられるという情報を、キャッチした時である。河上は「無我の愛」第九号を買い、さらに「脱宗号」となった第十号を手にして驚愕した。トルストイの「わが宗教」とも重なり、河上は戦慄を覚えた。当時、河上の内面では、相反するものが闘っていた。つまり、無我の精神への憧憬、帰着と、世俗的生活への未練とがそれであった。

立身出世の足がかりとなる東京帝国大学を卒業し、結婚もし、子供も生れ、農科大学、学習院、専修学校などの講師の職にもつき、いわゆる生活の基盤は整いつつあった。これらをすべて放擲し、絶対的非利己主義への道を歩むべきかどうか。人生の歧路に立った河上は、この悩みを卒直に伊藤にぶつけたのである。明治三十八年十二月一日のことであった。

「年末の希望としておったのは、何か人世の進歩に貢献をしたいというので、自分の学問の方面からして、『善を為し易く悪は為し難し』という様な社会組織

を工夫して見たいと思っております。しかし、御教によると、(あるいは誤解をしているかも知れませぬが) 社会組織の工夫などという事は、極々つまらぬ事で、人世の平和幸福というものには、そんな廻り遠い事をせんでも、ただ『無我愛』これ一つの実行で即時に成就できるもののように思われます。∴(略)∴そこで自分のやっている職業がつまらなくなり、博士号でも得たいというような自惚が極々馬鹿らしき事となり、何となく不安でたまりませぬ、如何したらよいでしょうか。<sup>23)</sup>

伊藤に差し出した封書の裏面を見て、差出人が河上だと知った石野準(彼も河上と同じ山口県民で、伊藤に心酔し、すでに無我死に入死していた。)は、即刻、河上をたずね、無我死訪問を強くすすめ、伊藤との会見を要請した。

河上の書簡を受けた伊藤は、傲慢ともとれるような返事を書いている。

「あなたへの御答は、あなたのお手紙の文字で充分です。『社会組織の工夫などといふことは極々つまらぬ事で、人世の平和幸福といふものは、そんな廻り遠い事をせんでも、たゞ『無我の愛』これ一つの実行で

即時に成就でき』ます。『さすれば、経済学の研究など、実はつまらぬ事で、寧ろ全力を挙げて無我愛の実行と伝導に尽』すべきです。これが為に妨となることは、万事放擲すればよいのです。<sup>(24)</sup>」

明治三十八年十二月四日、河上は石野の説得に忠実に応え、大日堂の無我苑を訪れ、急転直下、伊藤の指示通り、生活基盤となっていた各大学の講師の職は、すべて投げ捨て、無我の愛の実践と伝道に一生を捧げる決意をしたのである。河上が伊藤に関心を示し、共鳴していったのは、伊藤の説く無我の愛の哲学的思想的内容もさることながら、彼の生きる姿であつたという人もいる。つまり、伊藤の僧籍返上、大学退学を通しての非利己主義実践者という型への憧憬だ。

河上の無我苑突入を酷評する人もいた。「社会主義評論」執筆途中で、もはや千山万水楼主人が河上だということがバレ、権力に対する恐怖を抱いていたと同時に、厳しく批判した大先輩たちへの贖罪の意識が強くはたらいたからだ。白柳秀湖は次のようにいう。

「若し初めの計画通り彼の本名が絶対に世間に洩れず、政府の注意も彼が如く峻峻でなかつたこと、したならば、彼は恐らく無我愛の道場には走らなかつたで

あらう。然るに、千山万水楼主人が法学士河上肇であることは評論の事に至つて既に世間に洩れ、その末期に及んでは隠れもない事実となつた。彼は官憲からも睨まれたが、その峻烈に罵倒した先輩教授に対して全く立場を失つてしまつた。さうして最後に伊藤証信の『無我の愛』を見て心機一転したりとし、筆を擱き稿を止めて東鴨の大日堂に趨つた。<sup>(25)</sup>」

この白柳の酷評に対して、河上は、これはまったくの嘘で、迷惑千万だとしている<sup>(26)</sup>。真偽のほどは、ともかく、こういった見方が登場するほど、この河上の変身ぶりは、青天の霹靂だったのである。

身震いするほど感動し、心酔したこの伊藤の無我の愛であつたが、無我苑への二回目の訪問で、河上は、はやくも伊藤に強烈なパンチを放つてゐるのだ。己には何のつながりもない邪説とまで罵ることになる。なぜか。それはこういうことであつた。絶対的非利己主義を強説しながら、無我苑の人たちは、ぬくぬくと情眼を貪つてゐるではないか。このような姿に河上は激怒したのである。知行合一に理想を置く河上の姿勢は、とうていこのような状況を是認するわけにはいかなかつた。河上はこう主張してゐたのである。

「私の方は、いやしくも全力を献げて他を愛するを主義とする以上、夜分も寝ずに他人のために働くというところまで努めねばならぬと考えていたので、そこに甚しき立場の相違がある。…(略)…無我苑を訪問して見て、何となく意気の相投合せざるものあるを感じたものと見える。かくて私は、無我苑から独立して、伝道事業を起し、自分の方は寝ねず休まずして事に従わむと決意したのである。」<sup>27)</sup>

河上はどこで何故、睡眠にこだわるのであろうか。「たとえば睡眠」というのであればわかりやすいが、いきなり、直接的に睡眠に執着するのである。決死の覚悟が出来れば、この際なんでもよかつたのであるが、たまたま河上の眼前にこの事実が現われたのである。不眠不休という自虐によってのみ、この墮落してしまった己の精神を破壊出来るという強烈な河上の意志決定が、ここにはのぞいて見ると見てよからう。自己滅却、自己否定の実験ともいえよう。

これは清沢満之が、「ミニマム、ポシブル<sup>28)</sup>」を実践したのと類似している。人間はどこまで生活を簡素化出来、どこまで己を放擲可能か。清沢もまた、絶対的非利己主義のための厳しい禁欲を決意し、それを実践

した。東京帝国大学卒業後、明治二十一年に京都府立尋常中学校長に就任した清沢であったが、翌々年の二十三年には、はやくもその校長職を辞退し、禁欲的精神主義的生活に身を投ずるのである。校長時代の山高帽、人力車といったものはその姿を消し、行者的修業がはじまるのである。宗教界の墮落、腐敗に抗して僧の原点に回帰しようとしたのである。

河上も次のような決意表明をした。

「実際のちを放り出す決意をしたのである。私は元来蒲柳の質で、当時は生命保険の加入をすら断られていたようなからだだから、『寝ねず休まず』などという生活を続けようものなら、間もなく殮れるに決まっていた。しかも私は断乎としてそうした生活に突き入ろうと決意した。私は死を考えたのではなく、死を決意したのだ、死に直面したのだ。…(略)…それは禪家という所の大死一番なるものに相当する。」<sup>29)</sup>

原稿執筆中のことであるが、明治三十八年十二月九日の夜中に、河上はこの世にあらざるような異常な世界にはまったという。「余が頭脳は実に形容すべからざる明快を覚え、透明なること玻璃の如くなるを感じたり<sup>30)</sup>」とか、「余は俄に身体の軽く空に浮び上る如く

覚えたり、何物かありて余が身体を軽く和かく抱き上ぐるか如く覚えたり<sup>31)</sup>」といったような具合である。

無我苑在死の人々に対し、その姿勢に疑いを抱いていた河上は、ともかく、この苑を去り、本郷湯島に住み、その地で真の無我愛の実践と伝導の任務を果たそうとしたのであるが、どういふわけか、年末には、また大日堂の近くに、仲間と共に住み、そこから「読売新聞」社にも通勤している。この第三分苑と呼ばれた家に同居していた倉内雅一は、当時の状況を次のように説明している。

「大日堂の南二丁目ばかりの処に、河上兄が寓居せらるゝ事となつて、之を第三分苑とした。：(略)：今は河上兄と、兄の令弟と、炊事する婆さんと、僕の四人暮らしである。屋賃は四円五拾銭、四畳と六畳と三畳との三間である。四畳の間の窓を開け、冬松の景色を眺めつゝ、火鉢を擁して話するのは大変面白い。：(略)：河上兄は日々大日堂の座談を写し、それを『人生の帰趨』の原稿にして、読売社へ送る事にせられた。<sup>32)</sup>」

一時、伊藤の無我の愛、無我苑に対して、激しく厳しい批判の矢を放った河上であつたが、それでも、こ

の大日堂の無我苑、第三分苑において、二ヶ月ばかり、つまり無我苑が閉鎖されるまで、無我の愛の実践活動、伝導活動に懸命なる努力をしたのである。

この無我苑の閉鎖に際し、河上は己の存在の大きさを顕示している。この苑の閉鎖も、また「無我の愛」の発刊中止も、その原因は己の辞退にある、と。さらに、そもそもこの無我苑なるものが世間に知られたのは、己が入苑してやつたからだというのである。このあたりが、無我、非利己主義を説く河上にしては、いだけない発言なのである。

この河上の自己宣伝的発言に対して、伊藤の反応は冷やかである。たしかに、河上が入苑したことにより、無我苑の知名度が多少高くなりはしたが、彼の退苑が無我苑の閉鎖理由でもなければ、「無我の愛」の刊行中止の理由でもない<sup>33)</sup>と断言し、次のようにいう。

「なるほど河上さんの入苑によって、無我苑が一層有名になり、雑誌も部数を増してゐたことは事実であるが、河上さんが無我苑を出たから無我苑が閉鎖せられ、雑誌も廃刊になつたのでは決して無く、その反対に、同朋全体(河上さんも入れて)の合意によって、無我苑が閉鎖されたからこそ、雑誌も廃刊せられ、河

上さんも苑を出られた次第である。<sup>34)</sup>

河上の言動は二の次で、無我苑閉鎖の根源的理由を、伊藤は無我苑構成員全体の未熟さに求めている。伝導する資格も獲得出来ないような未熟メンバーが、極めて傲慢にも、その役割を担おうとしたところに、そもそも間違いがあったという。その点で、河上が無我苑の具体的活動に対して疑義をさしはさんだのは、やむをえないところであるし、その弱点を予見しうる心眼を持っていた河上を、伊藤は高く評価しているのである。河上もまた、「大死一審」で、次のような境地に到達したことを記しているのである。

「元来このからだを自分の私有物と思ふのが間違いで、これは暫く自分の預っている天下の公器である、ということを知るならば、このからだを大切に育て上げ、他は必要と認めた場合に之を天下の為に献げるということこそ、自分の任務でなければならぬ、ということが会得される。かくて私は、絶対的な非利己主義を奉じながら、心中毫末の疚しさを感ずることなしに、このからだに飲食衣服を供し、睡眠休養を許し、なお学問をもさせ智識をも累積させて行くことが出来るようになった。<sup>34)</sup>

若き河上肇が、この時期体験したこの伊藤の無我苑への接近、突入の問題は、その後の河上の人生上、いかなる意味を持つものであったのか。前述した通り、経済学、とくにマルクス主義的経済学の先駆者としての河上の評価は、これはこれで重要ではある。しかし、このような枠にはおさまらぬ河上の不可思議な魅力の一つが、この時期に噴出し始めているように思える。

大熊信行が、この無我苑への入苑を、河上の「奇行」の一つにあげたことは、前述したが、「奇行」でも「珍行」でもいい、私はここに、河上の面目躍如たる「幼児」「童子」「童心」的行為を見る。世の中の一般的常識などというものに囚われず、愚行、愚考、愚直に思われるほど赤裸々な純粹さを貫いてゆく真摯な姿勢は、「大人」には通用しない。河上は、知人が夏目漱石の手紙のなかに、次のような文章を発見したといつて知らせてきたことを、『自叙伝』に引用している。

「明治三十九年二月三日付を以て、野間真綱に宛てられたものである。『拝啓。……小生例の如く毎日を消光、人間皆姑息手段で毎日を送っている。これを思うと、河上肇などという人は、感心なものだ。あの位な決心がなくて豪傑とはいわれない。…(略)…人間

は他が何といつても、自分だけで安心して、エライという所を把持して行かなければ、安心も宗教も哲学も文学もあつたものではない。敬具。』私は冷かされてゐるのかも知れないが、別に恥しい気もしないから、初めて知つたこの手紙をここに書き入れておくのである。<sup>65)</sup>

普通人というか、常識人というか、いわゆる世間的「大人」は、皆姑息な、つまり一時的間合せで人生をやつてゐる。河上はその点、異常ではあるが、その異常なところが素晴らしいではないかと漱石はいうのだ。

「大人」として生きるということは、一般的通念のなかで姑息に生きることである。現体制のなかで波風を立てず、清濁を合わせ吞むという理屈をつけながら世間で拾つた垢を一つ一つ身につけて生きることである。

河上の無我苑入りによる非利己的愛他精神の徹底化は、この「大人」の常識的世界を打破するに充分な行為であつた。彼の求道は、真理を追い求める強烈な心情であつて、決して常識と妥協し、それに敗北して「大人」になるプロセスではなかつた。客観的真理を追い求めるためには、その前提として熱き主観・心情

が要ることを河上は示唆してくれている。情熱なき禁欲とか、客観化というものは、まやかしい以外のなにもでもない。

この時、河上の取得した宗教的、非合理的靈的直観は、その後の彼の思想、行動を支えてゆく、一つの大きな弾機となつてゐる。宗教的真理とは、河上にとつて、絶対的無我につながるものであるが、この絶対的無我の世界の自覚こそ、彼の求道の到達点であつた。このことの自覚と、科学的真理との共存こそが河上の真骨頂となる。

マルクス主義と宗教の矛盾を説くのが、世間の常識となつてゐたが、河上はこの交接・共存について、晩年ここのべてゐる。

「今年六十五、人生を終らんとするに臨み、絶対的無我という一つの宗教的真理と、マルクス主義という一つの科学的真理とは、私の心の中に牢乎として抜くべからずものとして弁証法的統一を形成しつつ、我をして無上の安心に住して瞑目するを得しむる我が一生の所得であつた、と私は確信して動かない。<sup>66)</sup>」

マグマのような危険物を内包した河上は、「幼児性」を常に保持しながら「大人」の世界を歩いている。

世間的、一般的通念では理解し難い「奇行」を断行し、常識では打破困難なものに断固たる闘いを挑むことがある。志士の、経世家的人物の多くは、この「幼児性」をその属性としている。河上の尊敬してやまなかった吉田松陰も、もちろんそうであった。松陰は晩年、李卓吾<sup>50</sup>の「童心」説に傾倒し、草莽崛起の起爆剤としてゐる。朱子学的形式主義の虚を突いた卓吾は、完全なるアウトサイダーであったが、松陰も河上もそうであった。偽物、偽者を嫌い、純真・純心を我が意とする。仮や偽が横行する時、この純真、純心は、止むに止まれぬ情念として噴出する。

螢雪の功なつて、獲得していた大学の職も辞し、世俗的名譽、幸福への道を断念した。非利己主義の徹底化を「奇行」と呼ばずして何と呼ぶか。常執を逸した行動として、世間を驚愕させずにはおかなかつた。しかし、河上は、この「奇行」によって救われたのではないか。

河上は「大人」への道を極力嫌つた。そうなることへの己に対し、厳しい禁欲と課した。

近代は、この「幼児性」、「意心性」を宿す「奇行」を排除する現準作成に躍起となるところがある。混沌

の世界、未分化、未分離の世界に脅威を感じ、それを取り込むことが近代化の方向となつた。西欧的近代はそのチャンピオンであった。しかし、どれほど巧妙にその排除の論理が形成されたとしても、この「幼児性」的「奇行」は、地殻の深層にあるマグマのように、常に出口を探し求めてさまよつてゐる。近代的「知」は、この「奇行」を押し切つたと思つた瞬間に、足元をすくわれる歴史を経過してきた。そしてまた、そうなるのはそれを「知」の力不足だと思ひ込んできた。

近代的「知」の限界を知り、「信」、「情」、「心」という非合理世界を覗こうとした知識人はいる。先に触れた清沢満之などはその一例である。彼の求道のプロセスはそういうものであつた。西欧の近代的「知」の洗礼を受けた清沢は、一度は徹底的に理屈の世界に埋没した。その際、論理的整合性の有無が彼の価値現準となつた。直観、感性などよりも、知的作業を限界までおしすすめることを当初の仕事とした。近代的「知」という薬物を多量に飲まれた人間の眼には、論理、合理と異なる「信」や「情」というものは、闇の世界に存在する恐怖と映るのである。そして、その近代的「知」には、「信」や「情」を打ち消そうと血眼になる

ところがある。理不尽な弾圧、殺戮が次々と計画される。清沢は、このことを最終的には理解するが、そこに到達するまでは、文字通り、生命がけの修養を、己に課すことになった。

清沢にはかなわぬところもあるが、「大死一番」にみられるように河上も必死の覚悟、決意をした。しかし、どことなく河上には一種余裕のようなものを私は感じてしまう。河上には、はじめから、あらゆるものを呑咽してしまうほどの巨大な非合理的、心情倫理的なものを、わが心中に備えていたように思える。どのように考えても、河上は、本質的にどうか、生来的にどうか、「知」やそれを磨くことにおいても、並の人間をはるかに超えているが、それ以上に、彼は「信」、「情」の世界に生きる人間であったように思える。そのような場所に彼を置くほうが、座りがいいというものだ。しかし、河上は身に纏絡する粘着物を削ぎ落とし、そのような世界から必死に逃げようとした。逃げても逃げても彼の肉体と精神の内奥に、幼年期への贖罪意識、松陰的志し意識、青年期に邂逅した数々の激情的思想家の魂が充満していたのである。

伊藤の無我苑、無我の愛に触れた瞬間、河上のマゲ

マは火を吹いたのである。そして、その噴火は、その後の彼の思想と行動の中核をなすものとなっていた。饗庭孝男の次の言を引いて、ひとまずこの稿を閉じることにする。

「この時に得た法悦の中の非利己主義の靈的直観がおそらくそれ以後の河上のあらゆる思想と実践の中心におかれていたことは推測にかたくない。…(略)…河上は、無我苑の体験から、一生の生活方針を得てゆくにたる一つの宗教的真理を把握することができた、と言い切ることができたのであろう。」<sup>(38)</sup>

注

- (1) 大内兵衛「自叙伝の価値」、杉原四郎、一海知義編『河上肇・自叙伝』(四)岩波書店、平成九年、三七頁。
- (2) 杉原・一海編『河上肇・自叙伝』(一)、平成八年、四一―四二頁。
- (3) 同上書、五一頁。
- (4) 同上書、八七頁。
- (5) 同上書、八八頁。
- (6) 同上。
- (7) 杉原・一海編『河上肇・自叙伝』(五)、平成九年、八三頁。
- (8) 同上書、八〇頁。
- (9) 赤城和彦(住谷悦造)は、「社会主義評論」の反響について、



次のようにのべている。「明治三十八年のある日、突如として千山万水楼主人なる匿名のもとに、『社会主義評論』が読売新聞紙上に掲載され、大学教授、とくに社会政策を看板とする桑田熊蔵、亀井延、戸水寛人、田島錦治諸博士の思想と怯儒を反撃し、安部磯雄、木下治江、堺利彦、幸徳秋水、片山潜の諸氏の思想の不徹底や矛盾を批判し、：(略)：当時一世の各文家幸徳秋水なども、境利彦と逢ったとき、千山万水楼主人とは誰れだろう、きつと新婦朝の大学教授かもしれぬと語ってゐたとのこと。」(河上肇博士の横顔)(下)、『教養』健文社、昭和二十一年、二五頁。

- (10) 『河上肇著作集』第一巻、筑摩書房、昭和三十九年、七七頁。  
 大熊信行「河上肇」、朝日ジャーナル編『日本の思想家』(3)朝日新聞社、昭和三十八年、一三五―一三六頁。  
 (12) 杉原・一海編『河上肇・自叙伝』(一)、一〇四―一〇五頁。  
 (13) 杉山平助「求道者河上肇」『文芸春秋』、昭和八年三月、三一―一頁。  
 (14) 『河上肇著作集』第一巻、五―六頁。  
 (15) 同上書、七七頁。  
 (16) 同上書、七八頁。  
 (17) 大内兵衛は、この伊藤の無我死、無私の愛と河上との関係をこのべている。「博士は、『社会主義評論』を書くうちに、早くもそのことをやめて無我死に入った。そして昨日までの経済学者は今日は一つの(世間からいえば一種のインテリキナ)宗教の宣伝家となったのである。」(大内、前掲、三七二頁。)

伊藤と何度か直接的に接触したことのある哲学者森信三は、

伊藤をこう評価している。「氏によれば、われわれ人間の個体的存在の最窮極的單元は、絶対に分けることのできない『意識点』であつて、それは、その絶対的不可分性のゆゑに、永遠に不滅であり、かくして氏は、自らの形而上学説を根底とする独自の靈魂不滅説に到達したわけである。：(略)：二、三の卓越した人々を別にしては、何人も扱わなかつた独自の世界観体系だつたといふことは、今日心ある人々の、改めた検討に値する事柄と思うのである。」(森信三「伊藤証信の哲学説について」、千葉耕堂『無我愛運動史概観』付・伊藤証信先生略伝)『無我愛運動史料編纂会』、昭和四十五年、一八五―一八六頁。)

- (18) 同上書、二六頁。  
 (19) 安倍能成は當時を回顧して次のようにのべている。「藤村の自殺が我々に与へた衝撃は大きく、未熟の身で人生を『一切か皆無か』につきつめて、自殺に駆られるといふ傾きの我々にあつたことは事実である。：(略)：岩波は藤村の自殺に刺激され、東片町の寓居で『巖頭の感』を読んで、林、渡辺と共に泣いたりした。」(安倍能成『岩波茂雄伝』岩波書店、昭和三十二年、六二―六三頁。)
- (20) 伊藤証信『無我愛の真理』蔵経書院、大正十年、十七頁。  
 (21) 同上書、一八―一九頁。  
 (22) 同上書、二〇頁。  
 (23) 杉原、一海編『河上肇・自叙伝』(五)、九三―九四頁。  
 (24) 伊藤証信『河上肇博士と宗教』ナニワ書房、昭和二十三年、六頁。  
 (25) 白柳秀湖『唯心的人物と唯物的人物評』『祖国』第二巻第五

- 号、昭和四年、四九頁。
- (26) 河上の白柳に対する反論の一部を引いておこう。「私は『社会主義評論』を書いて官憲に睨まれたといっているが、当時そんな警察方面の煩いというものは、影も形もなかったのである。：(略)：また千山万水楼主人が法学士河上肇だということが、執筆の途中世間に漏れ、そのために私が慌て出したもののように言っているが、これもまた全然嘘である。」
- (27) 「自画像」、杉原・一海編『河上肇・自叙伝』(一)、二二頁。
- (28) 同上書、一一二―一一三頁。
- (29) 寺川俊昭は次のような意味で使われているという。「その当面の意味は、人間が生命をつなぐに於ける最小限の可能点を確かめようとする実験ということである。真宗の俗諦勤使の教えに基いて、生命を保持しつゝ、衣食をどこまで捨てることのできるかという実験である。」寺川俊昭『清沢満之論』文栄堂書店、昭和四十八年、六七頁。
- (30) 杉原・一海編『河上肇・自叙伝』(五)、一〇二頁。
- (31) 同上書、一〇九―一一〇頁。
- (32) 同上書、一一〇頁。
- (33) 伊藤『河上肇博士と宗教』、一五―一六頁。
- (34) 同上書、一八頁。
- (35) 杉原・一海編『河上肇・自叙伝』(五)、一一六頁。
- (36) 杉原・一海編『河上肇・自叙伝』(一)、一四五―一四六頁。
- (37) 杉原・一海編『河上肇・自叙伝』(二)、岩波書店、平成八年、五一―五二頁。
- (38) 河上徹太郎は、李卓吾と松陰についてこうのべている。「思ふに童心説は松陰と卓吾の思想の楔機である。童心とは一と

先づ無垢の心と解していゝのだが、それが到らない稚なさと違ふことは勿論だ、それが大丈夫の直たる志に通じることには、これを松陰が「至誠」の精神で受けとつてゐることである。卓吾は童心を振りかざして、忌憚なく前代の腐儒の形式主義の虚をついた。：(略)：「真」と「仮」、即ちホンモノとニセモノの対立が、彼があらゆる批判の基準であつた。」

(河上徹太郎『吉田松陰―武と儒による人間像』文芸春秋社、昭和四十三年、三六〇頁。

- (38) 饗庭孝男『河上肇』近代の解体―知識人の文学』河出書房新社、昭和五十一年、一三一頁。

主要参考・引用文献 (河上肇の著作は省略)

- 伊藤証信『無我愛の真理』藏経書院、大正十年。
- 白柳秀湖『唯心的人物評と唯物的人物評』『祖国』第二巻第五号、昭和四年。
- 杉山平助『求道者河上肇』『文芸春秋』昭和八年。
- 赤城和彦『河上肇博士の横顔』(上・下)『教養』第一巻第二―三号、昭和二十一年四月―五月。
- 伊藤証信『河上肇博士と宗教』ナニワ書房、昭和二十三年。
- 天野敬太郎編著『河上肇博士文献誌』日本評論新社、昭和三十一年。
- 安倍能成『岩波茂雄伝』岩波書店、昭和三十一年。
- 古田光『河上肇―近代日本の思想家』東京大学出版会、昭和三十四年。
- 住谷悦治『河上肇』吉川弘文館、昭和三十七年。

千葉耕堂「伊藤証信と河上肇」『大法輪』昭和三十八年五月。

大熊信行「河上肇―求道のマルキスト」、朝日ジャーナル編『日本  
の思想家』(3)、朝日新聞社、昭和三十八年。

唐木順三「新版・現代史への試み」筑摩書房、昭和三十八年。

大内兵衛編集・解説「河上肇」〈現代日本思想大系(19)〉筑摩書  
房、昭和三十九年。

大河内一男「河上肇と求道の科学」、大河内一男・大宅壮一監修

『近代日本を創った百人』(上)毎日新聞社、昭和四十一年。

天野敬太郎・野口務編「河上肇の人間像」図書新聞社、昭和四十  
三年。

河上徹太郎「吉田松陰―武と儒による人間像」文芸春秋社昭和  
四十三年。

千葉耕堂「無我愛運動史概説―付・伊藤証信先生略伝」無我愛  
運動史料編纂会、昭和四十五年。

住谷一彦編集・解説「河上肇」〈日本の名著(49)〉中央公論社、昭  
和四十五年。

藤田省三「転向の思想史的研究―その一側面」岩波書店、昭和五  
十年。

「河上肇―生誕一〇〇年」『思想』昭和五十四年十月。

山田洸「河上肇」〈人と思想(5)〉清水書院、昭和五十五年。